経済論叢別冊　調査と研究（京都大学）第４号，1993年４月

〈社会進化の経済学〉

K. E. ボールディングの生涯と業績

池　上　　惇

はじめに

K．E．ボールディングは1993年春に永眠した。彼はあたかも，この死を予測していたかのように1992年に‘新しい経済学に向けて’と題する書物を公刊し，その第１部において自分自身の業績を自ら概括し自身の生い立ちから現在に至る生活史を研究史や社会活動史と関連させながら淡々と語っている[1]。

それは，一面では，彼が経済学や社会システムの一般理論において学会や社会が与えた評価の確認であるが，他面では，彼が社会や学会に強い反応や反論を期待した重要なテーマについて，社会や学会が無視あるいは敬遠をしてきた論点についての言及であり，一種の遺言ではないか，とさえ感じられる。

この紹介においては彼の生い立ちに関する回想を彼が何を遺言としたかったのか，に焦点をあわせて，社会進化論の特徴を要約してみたい。彼自身がこの書物で述べているように1980年代に彼が考えたテーマだけでも125に及ぶというから，その構想力や着想力は，まさに非凡というほかはないが，そのなかでも彼の理論の基本的な特徴を問うとすれば，「生物がつくりだすものも社会がつくりだすものにも共通する生産の‘遺伝’理論」が主張されていることである[2]。

彼はすでに1981年に公刊した「社会進化の経済学」において，アダム・スミスとマルサス，マーシャルらを進化論的理論家と呼び，ワルラスがニュートン体系を経済学に持込んで以来，「進化論的視点が失われた」こと，自分はこの視点を再発見するための指針を打出したい旨を述べていた[3]。

「経済生物学」という魅力的な試みはすでにマーシャルによって行なわれた[4]。しかし，杉本栄一が「近代経済学の解明」[5]で指摘しているようにマーシャルの叙述は断片的でより詳しい展開は後の研究者に委ねられていたのである。もしボールディングの試みが「経済生物学」展開の新たなきっかけを創りうるとすれば，彼の遺言を吟味してみることはなんらかの示唆を与えるものと言えるであろう。

他方で社会進化論を提起した研究者としてK．マルクスの名を失する事はできない。マルクスもまた，社会の進化を物理的なものとしてではなくて生物的なものに例え，社会の発生を生物の発生に類似のものと看做してきたからである。しかし，ボールディングの主張を見れば明らかなように，彼はマルクスの時代には考えることもできなかったＤＮＡや生命の設計に関する情報についての自然科学的発見を社会科学に導入し，サイバネティクスなどの新しい科学理論を適用した。この点にも併せて注目したい[6]。

1）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992.
2）*Ibid.*, ix.
3）K. E. Boulding, *Evolutionary Economics*, 1981.（猪木武徳，望月和彦，上山隆太訳．「社会進化の経済学」ＨＢＪ出版，1987年，序章を参照。）
4）A. Marshall, *Principles of Economics*, An Introductory Volume, First ed., 1890., Rep. 1952., p. 40.
5）杉本栄一「近代経済学の解明」上，岩波書店，1981年，初版序文は1949年12月１日付。
6）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992., p. 3.

Ⅰ　生い立ちからケインズとの出会いまで

彼は1909年「母の胎内に宿り，1910年1月18日，宇宙，太陽系，地球，ヨーロッパ，イギリス，リバプール，第4セイマー通りで」生をうけた。彼は少年の頃，この住所を以上のようにすべて書いた記憶がある，と書いている。そのことは彼の「一般システムへの最初の興味」であった[7]。そして，彼がその中の個々のシステムをどう認識したかということを物語っている。

彼の父と母は活動的なメソジスト教徒であった。このメソジストの家族にとって，彼は唯一の子供であり，唯一の孫でもあった。彼の父は家の後の店で細々と商売を営む配管工であった。彼はリバプールのまさしく，ど真中に住んでおり，彼の遊び場は道しかなかった。彼の両親は共に独学の人で，非常に聡明な人であった。父と母方の祖父はメソジスト教会の信徒伝道師であった。（「地方伝導師」とイギリスでは呼ばれる）そして，年に数回，いわゆる「巡回」のため，小さな教会へと説教しに行った。父は日曜学校の校長であった。祖父は鍛冶屋で，素晴らしい性格の持ち主であった。小学校より上に行ったのは，家族の中では，彼が一番最初であったという事実は，彼の遺伝子に関して語られていることはごくわずかで，むしろ彼の祖先達が生きてきた社会制度の実態を物語っているのであった。

彼の父はロンドンの小さなメソジスト教会で母とめぐり会った。母は父が配管の工事をするために行ったことのある家の貴婦人の召使いであった。これも先程同様，何たるめぐりあわせ！　母は，私がリバプールの人と結婚したいと言うと，その母は「そんなことしちゃいけないよ。アメリカへ行くくらいよくないことだよ。」と言っていたそうである。それほど，多くの点で，リバプールはアメリカ的な町だった。リバプールの古い建築物は1780年代のものだった。彼らが住んでいた通りの彼の遊び友達の中には英国人家族のものが，たった1人2人いただけであった。残りの者の家族は，アイルランド人やユダヤ人，1，2のベルギー避難民，さらに黒人の1家族などであった。だから，彼が「そんなに早くからアメリカ人になったのは不思議ではない」[8]。

彼は非常に大人びた環境に育った。彼らの家は，あまりに中心部にあったため，常に人であふれていた。母の2人の姉妹は夫を伴って，リバプールに引越してきた。それ故，いろんな従兄がいた。母方の祖父母も年寄ってからリバプールに移ってきた。何年かの間，祖父母は彼らの家の上の小さな部屋に住んでいたが，これらは父が彼らのために修理したものだった。巡回中のメソジスト伝導者も立ち寄った。夕食時のテーブルでの会話は面白いものであった。彼の父は自由党員であり，ウィリアム＝エバード＝グラッドストーンの熱心な崇拝者であった。（それ故ボールディングのミドルネームはエバートである）伯父の1人は保守党員であり，他に協同組合店の店長である労働党員もいた。それ故，政治談議は時に非常に活発であった。彼らはドミノをするのが大好きであったが，それには暗算がいっぱい含まれていた。カードや酒は，無論のこと，知らなかった。「角にあったパブは，「ダンテの地獄」への入口のように見なされていた」そうである[9]。

第一次大戦中のいくつかの経験は子供であった彼にたいへん深い影響を与えた。何らかの医療問題のため，父は兵役を免除になった。しかし，彼が大好きだった伯父は，しらみの這う塹壕から戻ってきた。その時の彼の目の表情を彼は生涯忘れられなかった。伯父は風呂場へ行き，その服を窓から下の庭へ放り投げた。そして彼の母は熱いアイロンで持って，しらみを全部殺した。ユダヤ人の家庭に，彼の親友であり，遊び友達である子供がいた。彼には兄がいたが，戦死してしまった。彼の死を知るやいなや，彼の母親は錯乱状態になってしまった。さらに，自分のおもちゃで，担架に負傷兵が戦っている

7）*Ibid.*, p. 4.

8）*Ibid.*, p. 4.

9）*Ibid.*, p. 4.

ものが大変恐かったらしい[10]。彼がどもり始めたのは，だいたいこの時期からであった。話下手という欠点が，一生ついてまわることとなったが，教師や講師としての生涯において，このことが障害となったことはあまりない，と彼は述べている[11]。

両親は彼の教育に大変気を使い，熱心だった。9歳の時，通りの上手にある，非常に貧乏でごみごみした英国教会の学校から，1マイル歩いた所にあって，もとはユニティリアン派の素晴らしい学校に転校した。そこには，よい教師がいて，多くの時間をさいて彼を教育してくれ，また両親にすすめて経済的余裕のない，人々が受けられるリバプール＝カレッジの奨学金のための試験準備をしてくれたりした。リバプール＝カレッジは全日制の学校で，美しいビクトリア朝のゴシック建築の建物であったが，ああ悲しいかな，今や廃墟となっている。そこは彼の住居から歩いてたった10分の所にあり，またそこでも優秀な先生とめぐり会った。当時，第5学年の時に資格試験に合格し，オックスフォードやケンブリッジでの奨学金をうけるため，第6学年に3年通っていた。彼は3つの科目の中から――ラテン語やギリシャ語しかやらぬ古典科か，現代史，言語，英語を専攻する現代科，物理，化学，数学しかやらぬ科学科か――選ばねばならなかった。その頃，ボールディングは詩や随筆を書いていたので，現代科に行きたかったが，メソジストでもある彼の数学の先生が家に来てくれ科学科に行くよう説得された。彼は3年間，数学，物理，化学をやって，オックスフォードのニューカレッジの化学の奨学金を得ることとなった。

青年期の宗教的側面もまた，彼にとっては重要であった。14歳の時，メソジスト的教育の結果，イエスのおしえの上に人生を設計しようと思ったらしい。また第一次世界大戦後の経験を忘れずにいて，いかに宣伝されようと熱心にすすめられようと戦争への反撥は強まるばかりで，彼は「人を殺すことも戦争に参加することもできなくなっていた[12]」。このため，彼は友人が行っていたクエーカー教徒の会合へいくこととなった。クエーカー教徒の集合場もまた，彼の住んでいた所から、それほど遠くはなかった。たとえ，周囲がスラム街であろうと，すべてが近くにある町の中心で育ったということは，言わずもがなの影響を与えるものだ。その会合での自由な沈黙に，私はすぐにくつろぎを感じた。そして，それ以来，世界中のクエーカー教団は，彼の人生の一部となった。

ところで，オックスフォードでの最初の年は，彼の人生の中で最も不幸な時期であった。当時の英国のクラス構成は非常に厳格であったので，オックスフォードでのリバプール出のメソジストとは，「まるでハーバードでのミシシッピ出身の黒人のようなものであった。彼が仲よくなったのは彼自身と似たのけ者のような者達とであった[13]」。彼はリバプールでのことを非常になつかしんだ。彼はその年化学にそれほど興味を持たなくなったチューターとともに化学を「読んで」学んだ。彼は研究室での作業がいやになった。その当時のオックスフォードでの主導的化学者であり，ノーベル賞受賞者でもあるフレデリック＝スディーは化学への興味を幾分失っていたためか，講義は奇妙な経済学の分野にむけられていた。それ故，その年の終わりに，彼は化学は自分の興味関心にそぐわないと一人で決めて，奨学金をそのままにして，政治学，哲学，経済学をできるかどうかをニューカレッジの校長宛てに尋ねる手紙を出した。すると，大学はそうすることを気前よく許可した。

それ故，ボールディングは6月の学期末に，そこの経済学のチューターで，ちょうどロンドン大学に教授として赴任しようとしていたライオネル＝ロビンズのところへ行き，彼にこれから経済学を学んでゆくとしたら，この夏，どんなものを読んでおいたらよいかを質問した。ロビンズは「マーシャルの経済学原理とピグーの

10) *Ibid.*, p. 5.
11) *Ibid.*, p. 5.
12) *Ibid.*, p. 5.
13) *Ibid.*, p. 6.

原生経済学，カッセルの社会経済学原論，またホートレイの経済問題を読んでおいたらよかろう」と答えたそうだ[14]。彼はこれらの本を図書館で借りて，長い夏休みの間（彼は貧しくて他にどこへも行けなかったので）リバプールへと帰っていった。彼の数学的裏付けの（高校でかなり高度な微積分をやっていた）ためワルラス均衡について解説したカッセルをよく理解することができた。マーシャルからは価格理論を，ピグーからは社会関係を学んだらしい。これらは，1929年のことであった。イギリスでは現実には，1926年のチャーチル下ですでに大恐慌が始っていた。彼を戦慄させたのは失業であった。それはリバプールばかりでなく，南ウェールズでも間近に見ることができた。この世界を救いたいと思っている若者にとって化学は無力のように思えた。その時，人類の最大の問題は経済であると彼は思った[15]。

1929年の秋にオックスフォードに戻ってきた時，彼の経済学のチューターはヘンリー＝フェルプス＝ブラウンであった。ブラウンはその時あまりよく経済学のことを知らなかったらしい。ブラウンはちょうど歴史をあきらめたところで，思うにこの事実こそがブラウンをよきチューターにした，とボールディングは信じている。偶然の一致であるが，ブラウンは経済学を学ぶため，アン＝アーバーにあるミシガン大学へ行き，そこからボールディングに手紙をくれたりした。後にボールディングがアン＝アーバーで58年も過ごすことになろうとは，その時露ほども思わなかったことであった。オックスフォードでの2年目，彼のチューターは後にイングランド銀行のエコノミストとなったベリオル・カレッジのモーリス＝アレンであった。当時彼の能力は「一切の出版物を出さないことであるとうわさされておりそれから察するに，アレンは思慮深い人であったに違いない」とボールディングは考えた。その年，彼は小額とはいえ大学の奨学金をうけることとなった。首席で終えた後，オックスフォードでの卒業論文作成にとりかかったがそれを1，2週間おきにアドバイザーに見せなければならなかった。アレンはよく彼にどうやってすすめてゆくのかを尋ねたが，それに対し，彼は「ぼちぼちと」と答えていたのだが，だいたいそんな風にやってゆくこととなった。彼は資本移動について書いていたのだが，それはそれ以来なくなってしまった。恐らく，これもそうなる運命にあるのであろう。と彼は思ったらしい[16]。その当時のオックスフォードの図書施設は信じられぬほど粗末だったので，もし何か読みたいものがある時には，ロンドン大学へ行かねばならなかった。この年に彼はキリスト教会の奨学金を志願している。彼に宛てて，不意に親展書なるものが送られてきて，そこには，要するに私がそうでなかったにもかかわらず「君は優秀であるが，我々の一員ではない。」と書かれていたそうだ。彼は「つねにリバプール生まれのメソジスト教徒としての生いたちを，このオックスフォードにおいては，受けいれてもらえないように感じた」と記している[17]。

彼が「『Displacement Cost』概念の経済理論における位置」という小論を書き，それをエコノミック・ジャーナル編集長のジョン＝メイナード＝ケインズに送ったのは，学部学生としての最後の年，1931年のことであった。修正を要求する広範囲なコメントの後，ケインズはそれを受け取ってくれた[18]。それは，見知らぬオックスフォードの学部学生に対しては本当に異常なほどの扱いであったろう。その年はまた，ケインズが貨幣論を出した年にもあたり，彼は非常に興奮しながら，特に最後の歴史の章を読んだ。それは彼に新しい歴史観を与えてくれたが，それが，それ以前から，イギリスで教えられていたにもかかわらず，その時になって，はじめて知ったのである。ボールディングによる

14）*Ibid.*, p. 6.
15）*Ibid.*, p. 6.
16）*Ibid.*, p. 7.
17）*Ibid.*, p. 7.
18）K. E. Boulding, 'The Place of the "Displacement Cost" Concept in Economic Theory', *Economic Journal*, Vol. 42. No. 165（March 1932）pp. 137－41.

と，「ハーバート＝シュタインの『アメリカにおける財政革命』という本の中でシュタインは，私とサムエルソンがそれぞれ別々にフランス革命の際のワーズワースの時の有名な一節「大いなりしかな，かの夜明けに生きてある。すばらしき極みかな，若きことは。」を使用していることを引用して，若者へのケインズの衝撃を述べている。」と書いている[19]。彼がこの引用を用いたのは，1931年の貨幣論を参照してのことであり，サムエルソンは1936年の一般理論を参照してのことだった。シュタインが指摘したのは，２人ともその時21歳であって，２人の「至福」はケインズに関係あるというより，21歳に関係があるということだが，失業が依然として深い謎におおわれていた1931年においてさえ，「ケインズは生産的であったということに驚きの念をかくし得ない。」とボールディングは指摘している。彼によると，アルフレッド＝マーシャルが依然として経済学のバイブルであり，計量経済学は地上線上にまだその姿をあらわしていなかった。経済学者によって表わされる世界は，失業と貧困の現実世界とはあまりにかけ離れているように思われたのである。その年，大恐慌が，彼のいたオックスフォードで大動揺を起こしていたにもかかわらず，それに対して，ほとんど注意が払われなかったように彼は記憶している。あの当時，彼らはどういうわけか，別の昔の世界に住んでいて，その当時の経済問題に対して，驚くほど鈍感であったらしい[20]。

Ⅱ　シカゴ，エディンバラ，国連そしてアイオワ
——さまざまな出会い——

1932年，ボールディングはシカゴ大学派遣の英連邦特別研究員に着任し，同僚８人と「ファーストクラスで旅行した[21]」。同じ船にはＪ．シュムペーター教授も偶然に居合せた９か月かかる船旅のうちに彼等は非常に親しくなった。

シカゴ到着後，彼のアドヴァイザーに任命されたのはヤコブ・ヴァイナー教授であったが，脚注や博士号の有無を気にするなど，オックスフォードですでに経済学研究の基礎を築いていたボールディングにとっては帰郷心を促進する効果しかなかった。そこで，彼は「ここでは自分の好きなものだけをやろう」と決意する。そのような状況にも関わらず彼にある刺激を与えたのは，ヘンリー＝シュルツとフランク＝ナイトであった。前者は計量経済学の草分であったが，「計量経済学の技術が彼の視野を現実世界からそらせる」ことは決してなく，「つねに計量経済学を主人というよりも奴隷として考えていた[22]」。ボールディングによるとシュルツは1930年代半ばに自動車事故で死んでしまったが，もし彼が生きていたら計量経済学はもうすこし変ったものになっていたのではないか，という。それは「シュルツが思想の替りにテクニックを使うような人間ではなかったから」である[23]。

当時はまだ「シカゴ学派」は存在していなかったが，彼が注目していた優秀な研究者はアルバート＝ハートであった。また，ボールディングは大恐慌の最中であるのに局面がフィードバックされた深刻な不均衡過程にあるというアイデアすらなく「気象学を語るごとく経済変動を予測する経済学」の空しさを痛感させられた。彼は「当時はまだサイバネティクスは創案されていなかったこと」を挙げて現実への科学の立後れを悲しんでいる[24]。ヘンリー＝サイモンズなどの一部の研究者は銀行の研究などによってシステムの欠点を鋭く指摘したが誰も相手にしなかったらしい。また，大恐慌時における利子率の役割を洞察していたアーヴィング・フィッシャー教授の影響力もほとんどなかった。ボールディング自身も物価下落のお陰で給費の余裕ができ，グランドキャニオンなどに旅行し，そこで父の訃報を受け取り急遽帰国

19）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 7.
20）*Ibid.*, p. 7.
21）*Ibid.*, p. 8.
22）*Ibid.*, p. 8.
23）*Ibid.*, p. 8.
24）*Ibid.*, p. 9.

するが，再びアメリカに来て，今度はハーバート大学のシュムペーターのもとでオーストリア学派の研究に励む。気胸にたおれたときイギリスから母が渡米しフランク＝タウシッグ教授の配慮もあって無事に到着し看病して呉れる。シカゴにもどって仕事を始め，「資本の理論」をまとめる。しかし奨学金が底をつき，イギリスに戻る。1934年のことであった。

1934年，エディンバラで職を得たボールディングは，ここでスコットランドの「落着きぶり」に苦笑しつつもウイリアム・バクスターから会計理論を学び，ペイトンの理論に接して彼の企業や資本に対する考え方を一変させた。彼は企業を「バランス＝シートを常に変化させているホメオスタシスの原理で動くもの」と把握した。この時期フランク＝ナイトが「投資理論再考――ボールディング氏とオーストリア学派」を公表し，この結果ボールディングの名は急浮上して「学位をとる必要がなくなった[25]」。このころ彼は自分では重要と思う2つのアイデアを生みだした。ひとつは「demographic theory of capital」，いまひとつは，経済学はフローとストックの混同によって悪影響を受けている，という点であった。

1937年8月，彼がフィラデルフィアで開催されたクエーカーの世界大会に出席しているとき，友人からニューヨーク北部のコルゲート大学に職があるという知らせがあり，ここに就職，ここで名著「経済分析」を出版し名声を得る。1941年結婚し，プリンストンにあった旧国際連盟経済財政課で第1次大戦後のヨーロッパ復興に関して調査に従事する。農業地域の分析を試みたのち，1942年6月，クエーカー的発言が不穏当と看做されて解雇される。そこでフィスク大学のナッシュビル・カレッジに移りそこで「平和の経済学」を書く。1年後，労働経済学のセオドア＝シュルツ教授の招きでアムズにあるアイオワ州立大学に移り労働組合の調査を手掛ける。彼によれば「最も価値のある学習体験」[26]であった。

Ⅲ　経済学の再建
――ミシガン大学と一般システム論――

この結果，ボールディングは労働移動などの研究にあたっては，経済学と同じくらい社会学，政治学，人類学にも関心を払うべきだと確信した。そして，このことから社会科学の統合ということに興味を持つに至る[27]。彼によれば社会科学はすべて根本的には，社会システムという同じものを対象としているのであるが，その山の頂を何とするかによって少し違った社会科学の領域が設定されうるにすぎない。もっとも，彼は，本当の労働経済学者になるわけではない。アムズでの頃，彼は「経済学の再建[28]」を書き，2つの中心的テーマを設けている。それらは

1）資本は所得より重要であるということである。それは，資本の利用が消費以上に重要と思われる家計については，特に当てはまる。
2）利潤のマクロ経済学である。それはケインズの「貨幣論」と「寡婦のつぼ」という概念をもとにしたものである。それは後日，彼が「K理論」と呼んだもので，彼がそう名付けたのは，それがケインズ，カレツキ，カルドア，ケネス（彼自身のこと）の業績に基づくためであった。しかし，経済学者たちは頑強に再建策を拒んだ。彼の判断によれば，この分野での彼の業績は，あまり影響を与えなかった。

アムズにいる時，彼は，戦時から平時への経済移行に関するすべての問題を取扱う経済発展委員会に勤めることになった。アメリカ経済の素晴らしい成功の1つは，ひどい戦後不況を生じさせることなく，第2次世界大戦後に軍縮を大規模に行いえたことにある。彼はこの成功に，

25）F. H. Knight, 'The Theory of Investment Once More ; Mr Boulding and the Austrians', *Quarterly Journal of Economics*, Vol. L（1936）pp. 36－67. K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 10.

26）*Ibid.*, p. 12.

27）*Ibid.*, p. 12.

28）K. E. Bonlding, *A Reconstruction of Economics*, 1950.

自分がいくばくかの貢献ができたのではないかと自負していたらしい[29]。

1949年，彼はアンアーバーにあるミシガン大学へ移った。もちろん彼はアムズを非常に気に入っていた。そこは，農学部と工学部が中心の素晴しい大学で，大学は，主にそこの卒業生によって占められていた州議会によって支持されていた。純然たる教育論理を持っていて，大学に一流の教養科目を設置しようと頑張っていた。しかし，ミシガン大学は，それより大きく，そこより一流の施設が整えられていた。その時までに，彼はよい条件で，ポストを得ていたし彼は社会科学の統合という問題に没頭していて，これをゼミナールで教えることができるのなら，移ってもよい旨を伝えると，大学側はこれに賛同してくれた。経済学部長はレオ＝シャーフマン１世で，彼は何年も，この一筋縄ではいかぬ学部の形成にあたっていた素晴らしい人物であった。また，ボールディングは優秀な秘書をつけてもらい，そのため，出版点数がかなりあがった。

アンアーバーは恵れた環境にあった。アンアーバーに移って２年して，最初の子供を授かり，それからそこにいた18年の間に，もう４人の子供をもうけた。家族を養ってきたこの年月は素晴らしいものだった。アンアーバーの友好会は非常にきさくなものであった。また，だいたい同じ年頃の子供を持った多くの家族と付き合い，それはまるで南京の大家族のようであった。そのため子供達は，あっちこっちの家を行き来していた[30]。

アンアーバーでの期間は，３つの重要な時期によって区切ることができる。最初は，カリフォルニア州スタンフォード大学の行動科学振興センターで過ごした，1954年～1955年にかけての期間である。それはセンターが活動しだした最初の年にあたり，人類学者のクライド＝クラックホーンや一般システム論の先駆者，ルードリッヒ＝フォン＝ベルタランフィなどを含む人々が参加する。非常に興味深いものであった。彼がアン＝アーバーで行っていた社会科学の統合に関する毎年の講義は彼がわけへだてなく接することのできる専門を持つ人のための講義へと変わっていった。（このことがベルタランフィと一般システム論に接触する機会となった。）彼は，毎年，違う演題を選び，その演題に関係する分野の人達を巻き込んでいる。カルフォルニアに来る直前に，彼は成長論のセミナーを終わらせたばかりだったが，その参加者は，生物学者（細胞と組織の成長）から建築家（建築物の成長）や経済学者（経済成長論）に及ぶものだった[31]。

研究所に来て間もないある日，ベルタランフィと，数理学者であるアナトール＝ラポポート，と生理学者であるラルフ＝ゲラードと彼の４人が昼食の席を共にした。その席で明らかになったのは，４人とも全く分野は異なりながらも，それぞれ一般システム論を研究しようとしていたことであった。ベルタランフィは生物学，ラポポートはゲーム論と神経学，ゲラードは生理学，彼は経済学という分野から，それぞれ研究していたのであった。

参加者たちは「研究会を発足させてみたらどうかね。」ということになる。アメリカ科学振興学会の大会がその年の12月，バークレーであった。それ故，全員で会議を召集し，人が来るかどうかを見きわめてみることにした。非常に興味深いことに，約70人の人が実際に会議にやって来て，そこで，一般システム研究会が発足した。その会は現在も活動しており，最近，システム科学国際学会と名称を変更されている[32]。

研究所にあった他の新たな発展に，平和研究がある。アナトール＝ラポポート，ヘルベルト＝ケルマン，ハロルド＝ラッセル，レービス＝リチャードソンの息子であるステファン＝リチャードソンを含む，ボールディングのグループでは，戦争と平和が明らかに今日の最重

29） K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, *ibid.*, p. 12.

30） *Ibid.*, pp. 12－13.

31） *Ibid.*, p. 13

32） *Ibid.*, p. 13

要問題にもかかわらず，誰もそのことを真剣に研究していないということについて話し合った。それ故，彼らは雑誌を発刊することにした。アナトール＝ラボポートと彼はミシガン大学へ戻り，そこでロバート＝アンゲルと他の1，2の人達と共に‘Journal of Conflict Resolution’を刊行した。それは最近になって，平和科学研究会の公式雑誌となった。このことが，紛争解決センター創立のもととなった。

研究所でのその年の終わり，その頃にはほとんどすべての人が家に帰ってしまっていたが，ボールディングは残って，「イメージ」を書いた[33]。それは，人間は刺激よりも心の中にある世界のイメージによって行動を起こすという行動主義への批判を展開したものであった。行動科学振興研究センターにとって〔この行動科学（Behaviral Sciences）という名称は社会科学（Social Science）という語が社会主義（Socialism）と似ていることを危惧して，偶然，生み出されたものだ。〕その行動主義が，ボールディングの最初の論文でアタックされたということは皮肉なことであった[34]。その本は不思議なくらいのインパクトを与えた。

1959年から1960年にかけての1年間，家族とボールディングは，ジャマイカの西インド大学へ行った。そこで彼は，経済学部筆頭客員教授という奇妙な役職についた。彼が，「紛争と防衛[35]」を書いたのはそこでのことであり，それはいろいろな点で，少々，経済学の帝国主義的産物といえるものであった。というのは，それは一部，経済学の貢献を，当時発展しつつあった紛争と平和の研究という広範な領域に適用したものであったからである。この研究分野は，1つの独立した学問分野となり，専門雑誌を刊行し，1962年の創立に，ボールディングと夫人が関っていた。現在では国際平和研究会といった専門学会を持つにいたっている。ジャマイカでの年月は彼らにとって有益であった。というのは，彼らにとって，熱帯地方での生活は初めての経験であったし，植民地世界が終わりをむかえつつあるという状況もあったためである。これは，ジャマイカが独立する前年のことであり，その意味では，アメリカで1775年に生きている状況と，こちらが平和裡に独立した点を除けば，少し似ているといえた。彼が権力の異なった形態の問題に興味を持ったのは，ここでのことであった[36]。

1963年から1964年にかけての1年間，彼は，東京の西端にある三鷹の国際基督教大学の客員教授として，日本で過ごした。彼は，人類の生命と経験がとうとうとこのアジアから流れ出しているさまに驚き，自分が何と愚かな西洋人であるかを実感した。彼の学生のほとんどが，マルキストであった。その当時の教職員組合もまた，そのように組織されていた。彼は人類の歴史は確かに特殊な言語によって表される要素によって成り立っている面があるが，そうではない要素になる過程もまた存在することを説き続けたが，無論のこと，彼らは，そうは思いはしなかった。日本での最後に，彼は「歴史解釈における特殊要素と非特殊要素」という講義をした。それをもとに「社会動学入門」を書き，後に改訂して「経済動学[37]」を出版した。彼はその後，何度も日本へ行っているが，そこには「深い愛着をおぼえる」と述べている[38]。

日本の学生に，彼はヨーロッパの国で日本と一番似ているのはどこかと尋ねたことを記憶している。その時，ほとんど例外なく，「イタリア」と答えていたそうだ。1960年代，彼は幾度となく，彼の甥の英国人，エドウィン＝ウェールズとともに，イタリアで素晴らしい休暇をすごしたが，そこの豊富な文化的遺産，人なつっこい友好的な人々にすっかり魅せられてしまったらしい。

33）K. E. Boulding, *The Image, Knowledge in Life and Society*, 1956.

34）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992. p. 14.

35）K. E. Boulding, *Conflict and Defense*, 1962.

36）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 14.

37）K. E. Boulding, *Ecodynamics ; A New Theory of Social Evolution*. 1978.

38）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 14.

1964年の頁，日本からの帰途，彼がコロラド大学で2週間ほど夏期講座を行うため，家族とともに，そこに滞在した。彼は，そこの美しさにすっかり魅了されてしまったのである。それ故，その何年か後，彼がそこで講義をする際，空港から学校へ彼を送ってくれた経済学部の友人が，大学は今，上級教授をさがしているのだが，誰かいい人を推薦してくれないかと言われた時，即座に，「私ではいけませんか」と返答したということは，別段，不思議なことではなかった。その時夫人は，ミシガン大学で社会学博士号を取得したばかりであり，彼女にも職を見つけて欲しい旨を大学側に伝えたところ，大学はそれに答えてくれた。それ故，彼らは1967年の秋，バウルダーに引越し，以後，非常に喜ばしいことであったが，そこに住み続けていたのである[39]。

彼がミシガンで過した最後の年の発展の1つは，贈与の経済学についてである。これは初め，紛争から，後に権力への興味から生まれることとなった。彼はなぜある紛争が創造的で，ある紛争か破壊的であるのかを不思議に思っていた。そうして，その主要な違いが，法，尊敬，愛情，愛といったものを含む，いわゆる，「統合力」（integrative power）にあるのだと結論づけている[40]。

ボールディングは権力の支配形態について大きな関心を寄せており，「それなくしては，経済力も脅威による力も効果のないものとなってしまう」と考えた。しかし，彼はそれについて非常に悩んだ。経済学者である以上，彼は支配形態を評価する基準のようなものがなくてはならないと思い，自発的贈与を考えつくにいたった。経済力は，主として，交換に依存する。「私があなたに何かを与えれば，その返礼に，あなたは何かを私に与えてくれる。もし私があなたに何かを与えておいて，あなたが何も私に与えないとしたら，少なくともこの物が会計士によって認められるものでなかったなら，これこそが贈与である。[41]」誰かが贈与経済学の基盤をもつ，すなわち，誰かに贈与を与えたのなら，これは統合関係についての特徴を示していることとなる。彼は贈与について研究するため，フォード財団から，贈与をうけた。彼は手助けのため，マーチン＝プファフという若者を雇い，ミシガン州立大学のイースト＝ランジング（現在のアウグスバーグ大学）で研究をおこなった。同氏はよい友人であったばかりでなく，素晴らしい企業家であった。彼らは，贈与経済学会を創設した。そうして，贈与には2つの源があることが分かった。1つは脅迫であり，もう1つは，統合である。それ故，彼はこのテーマに関する本の題名を「愛と恐怖の経済学――贈与経済学序説[42]」とした。

1955年，彼は一般システム論振興会初代会長になった。（その名称は，間もなくすぐに，一般システム学会となり，最近，システム科学国際学会となった。）1968年には，アメリカ経済学会会長と新たに創設された贈与経済学会会長となった。1974年，国際研究学会会長，1979年には，アメリカ科学振興財団会長となった。彼がアメリカ経済学会会長であった1968年，シカゴでの民主党大会とシカゴ市長デイレイの行動に対して，大騒動がもちあがった。抗議のため，シカゴに集まらないようにする強い動きが，各専門部会にあった。アメリカ経済学会は，その年の12月にシカゴで総会を開催することになっていて，彼が決定の責任義務をおう理事会の採決もシカゴで開催するか否かについて，6対6に割れる始末であった。彼はイリノイ州，エバントスにあるアメリカ経済学会事務局へ行き，彼らが宿泊することになっているホテルから，人々に会いに行き，心を割って話し合った。その結果，シカゴで行うことを決定したのであった。「理事会の普通のメンバーであったなら恐らく，それに賛成していなかったであろう[43]。」

39）*Ibid.*, p. 15.
40）*Ibid.*, p. 15.
41）*Ibid.*, p. 15.
42）K. E. Boulding, *The Economy of Love and Fear ; A Preface to Grants Economics.* 1973.
43）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 16.

バウルダーでの年月は，彼にとって非常に幸せで，生産的であった。彼は素晴らしい秘書兼管理者ビビアン＝ウィルソン女史と出会い，22年間もプラスを得た。彼女は彼の口述筆起をし，彼の書いたものを編集し，旅行の準備をし，事務室を整理し，彼の自叙伝を編集してくれた。ボールディングは一部は，この幸せな手はずのおかげで，また一部には，健康を保った結果，老化が遅かったため，70年代，著作がすすみ，講義ができ（この「講義」については，習慣的にいれるようにしている）世界中のあちこちで客員教授をこなすことができた。彼は「本当に果報者[44]」だったし，人生も素晴らしいものであったと思っていた。妻のユリスは優秀な学者であり，妻であり，パートナーであった。1992年，彼らは結婚して48年になる。5人の子供達は皆，面白い人物になった。14人の孫を授かったが，そのうちの1人はこの執筆中に生まれた。こうしてみると，マルサス主義者にとっての罪なるものを彼は，逆に，素晴らしいものと感じてきた。

Ⅳ　生涯にわたる著作の概括

彼がこれまで書いてきた作品を6つの時期に分けて，その数を秩序立てて見るために，本の主題とそれを扱った最初の著作物が出版された年を書き，それを年代順にし，10年ごとに区切った6つの期間中，その問題を扱った著作物（論文，本，批評，専攻論文，パンフレットなど）がいくつあるかを表にまとめてある。年がたつにつれて，彼の興味が拡大してゆく一方，彼がごく最近を除いて，現在まで興味を抱き続けてこなかった問題は，ほんの2，3しかないことが分かる。これは驚くべきことであろう。この表は彼によると「そんなに正確にとらえられたものでない[45]。」なぜなら，その著作がどの問題を取扱かったものなのかを明確に分類することは難しいことであるから。しかしこの表は，少なくとも，彼のこれまで生きてきた中で，拡がっていった興味をおおまかに表しているであろう。

この表は，彼が「経済学を超えて[46]」（1968年に出版した論文集のタイトルである）倫理学・平和・紛争学，一般システム論や宗教といった領域へ踏み込んでいったにもかかわらず，経済学が，私の生涯を通じての研究対象であることを示している。

価格理論

例えば「価格理論」(1)は昔から今なお続く関心の一例である。彼によれば相対価格構造というものは，常に変化しているが，非常に重要な社会システムの条件である。均衡が移るという概念は有益なもので，それは，アルフレッド＝マーシャルやアダム＝スミスにまでさかのぼることができる。均衡概念はある価格が「高すぎる」ことを表すものでもあれば，「安すぎる」ということを表すものでもある。もしある物が高ければ，その価格は次第に安くなってゆくであろう。逆に安すぎれば，高くなってゆくであろう。彼は依然として，市場における相対価格の流動性選好理論というものにこだわり続けている。それはあまり関心を集めなかったが，1940年代の初めに彼が研究をおしすすめ，1944年にその内容を本に書いたことがあるものである。彼によるとここでの重要な問題は，交換が交換者間での資産の再分配から成り立つということである。だから，相対価格構造は，多くの相異なる資産の全ストック（これは誰かによって所有されていなければならない）とそれらを所有しようとするすべての選好とに依存する。これらの選好は，大体，将来の相対価格構造の見通しに依存する。例えば，もし小麦の価格があがるという見通しを強気に持てば，小麦を持とうとする選好は増して，小麦の価格は上昇する。同じことが貨幣についても言える。もし人々が，貨幣の相対価格が上がると思えば，貨幣の手持ちを増やし，その結果，商品や証券の価格は下落し，貨幣の価格は上昇するであろう。

44）*Ibid.*, p. 16.
45）*Ibid.*, p. 16.
46）K. E. Boulding, *Beyond Economics, Essays or Society, Religion, and Ethics*, 1968.

彼は学生に金持ちになる確実な方法を時々教えた。それは常に，相対価格が最も急速に上昇する形で資産を持てということであった。彼は価値あるこのアドバイスを彼らに無料で教えてきた。というのも，たとえ，内部情報を持っていたとしても，どの価格が上昇するのかを正確に知ることは実際，不可能であるからである。もし市場での全資産の価値を不変とすると，ケインズが言ったようなカジノとなるであろう。そこでは，相対価格が上昇した資産を保有している人は，相対価格が下落した資産を所有している人の犠牲の上に利益を得ることになるのである[47]。

市場価格と，アダム＝スミスが自然価格と呼び，マーシャルが正常価格と呼んだものを区別することは非常に重要なことである。正常価格均衡は，相対市場価格が商品生産の有利，不利を決定するという命題に基礎を置く。もし小麦の価格が，それの生産により，相対的に利得が得られるという意味で「非常に高ければ」人と他の資源がそれに振り向けられ，小麦の生産量は増大し，小麦のストックは増し，小麦の価格は下落するであろう。今だに未解決な問題として，相対価格構造と基礎的均衡構造を変化させる技術変化はどのような関係になっているのかという問題がある。これについては，アダム＝スミスの有名な鹿とビーバーの例にまでさかのぼることができる。その例での市場価格とは，市場で鹿何頭に対しビーバー何頭を期待しうるかによって決定され，自然価格は，一匹のビーバーを生産するために投入されていた資源を鹿に投入した時，森で何頭の鹿を得ることができるかによって決定される。また，もしここで，市場でのビーバーの価格が，森でのビーバーの代替費用と比較して，相対的に「かなり高ければ」ビーバーの生産は有利ということとなり，鹿に投入されていた資源はビーバーに投入されることとなるであろう。そうした結果，ビーバーの価格は下落するであろう。ほんの一部の経済学者の提起した問題として，市場での生産活動における以上のような不利あるいは不利益に対し，他に採るべき途があるのかどうかという問題がある。例えば，技術変化があるが，それは代替費用を変化させる。彼によると「この問題に対する経済学者の研究がほとんどなされなかったのは驚きである。私にしても，その答えを知らないということを言っておかねばならない。」ことになる[48]。

マルクス主義

「マルクス主義」(2)への関心は彼が資本論三巻を読まなければならなかったオックスフォードでの学生時代にさかのぼる。彼によると「マルクスの初期資本主義への批評のいくつかは妥当なものだと思ったけれども，それによってうけた影響は，その本の内容とは全く違う方向のものであった。私は常々，自由市場には，かなり問題を含むものだとは考えているけれども，マルクス的解決は，自由の喪失と暴力への崇拝という点でのコストがあまりに高すぎるため，私にとっては受け入れ難いものである。[49]」

ポピュレーションと資本

「ポピュレーションと資本」(3)について，ボールディングは彼なりの考えをまとめてからもうかなりたった。彼によると，この世界は，物質，生物，社会等，すべてのものの総計として成り立っており，これらすべてのものは，ポピュレーション原理という非常に重要な原理に従う。この原理におけるものの増加とは，生物種における誕生と死，商品のような社会種における生産と消費のように，加わったもの（誕生または生産）から減ったもの（死または消費）を引けば出てくる。彼は以上のことを考えるにいたるために，必然的に確信したことは，「経済学者は生産要素を間違っている[50]」ということであった。彼によると生産機能という点から見れば，土地，労働，資本は明らかに極めて異質なものの総計であり，中世において，地，空，火，水が持っていた科学的妥当性と変わるとこ

47） K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 18.

48） *Ibid.*, p. 19.

49） *Ibid.*, p. 19.

50） *Ibid.*, p. 20.

ろがない。生産は，生物的なものであろうと，社会的なものであろうと，彼が「ノウハウ」と呼んでいるもの，すなわち，生物の誕生の際は遺伝子が持ち，商品生産の場合は，人の心や文書などの中にある遺伝要因によって考えられねばならないのである。この遺伝要因は，それによって，もしそのポテンシャルが実現されるのなら，人間であろうと車であろうと，選ばれた素材を製品へ変形するために，特殊な形態，特殊な位置にあるエネルギーを利用できなければならない。これは，賃金，利潤，利子，地代が分配要因であって，生産要因でないということを示している。

ストックとフロー

「ストックとフロー」(4)への関心は，彼によればポピュレーションと資本に関する興味に沿ったものである。彼は次のように考えた。「経済学は，ストックとフローを混同する間違いを犯してきたように思う。それは，アダム＝スミスにまでさかのぼることができる。この結果，経済活動の目的は消費であるという考えに反対する，長く不運な運動を展開することとなった。富者と貧者の違いは，周りにあって，アクセスでき，使用できる有益な物質の資本ストックに主として原因があるのである。衣服や家や車が消耗していくという事実（消費）からは何の満足も得ることができない。衣服を着，家に住み，車に乗るということ（使用）から，はじめて満足を得る。消費は一般福祉の要素であり，機能を増加させるものでもある。私は上手な料理を出されるのと同じくらい食べることから満足を得る。このことこそが進化の理由をよく示しているのである。物の使用が価値の低下や消費を含んでいるために，根本的に生産は必要なのである。使用しながらも有益な物のストックが増えるのは，生産が消費を超える時である[51]。」

クェーカー主義

「クェーカー主義」(5)についての著作に関しては彼は詳しくは触れていない。しかし，彼の伝記作家が指摘したように，経済学者としてのアイデンティティとクエーカー教徒としてのアイデンティティとの間にはいつも「創造的緊張」が存在し，それは彼の興味と作品に影響を与えていると指摘している[52]。

動学と発展

「動学と発展」(6)は彼の著作の中で2番目に大きな分野である。それは彼の心の中でずっと大きな領域を有してきた問題であった。彼は「常に安定的パラメーターを内包したモデルを強調し，基本的に代替的メカニズムに依存する『サムエルソン動学』と言われるものにいつも不満を抱いてきた。これは，パラメーターが常に変化し，システムのパラメーターが変化するまさにその時に超こる『時間領域 Regions of Time)』の現象が見うけられる社会システムには当てはまらないのである。[53]」彼によればハロッド，ドーマーを出発点とする1940年代以降普及した経済成長論は，彼が「料理本理論」と呼ぶもの，すなわち，土地，労働，資本を適当に組み合わせると，じゃがいもができるといったような誤った生産理論をもとにしているために，誤った発展をとげてきた，とされる。彼は生産を基本的に，知識とノウハウからなる遺伝構造と見て，道具，機械，建築物などといった形での資本蓄積は，この過程の一部であり，この過程においてこれらのものは基本的に制約要因であって，遺伝要因でないと考える。制約要因がある時，最も重要なのは，最もこの過程を制限する制約要因であり，彼によるとこれはいつも同じものだとは限らないのである。基本的に，彼は経済発展を進化の過程，学習の過程だと思っている。ノウハウという遺伝要因の変化である学習は，生物の遺伝子の変化のように偶然的なものである。それが表現型が学習能力を持つ生物にあらわれたなら，それは「非遺伝」進化であり，その進化において学習能力が次か

51）*Ibid.*, p. 20.

52）C. Kerman, *Creative Tension ; The Life and Thought of K. Boulding*, 1974.

53）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 20. K. E. Boulding, 'Region of Time', *Papers of the Regional Science Association*, Vol. 57, 1985, pp. 19－38.

ケネス=ボールディングの作品目録（1932−1988）　（10年ごとのカテゴリー当たりの出版物の数）

			30年代	40年代	50年代	60年代	70年代	80年代	合計
1	価格理論	1932	3	6	3	8	3	3	26
2	マルクス主義	1932	1	0	0	3	3	1	8
3	ポピュレーションと資本	1934	4	0	4	4	5	3	20
4	ストックとフロー	1935	1	1	6	1	0	0	9
5	クェーカー主義	1938	6	16	2	10	5	8	47
6	動学/発展/未来	1939	1	2	10	34	74	26	147
7	平和と戦争の経済力	1941	0	5	2	6	6	4	23
8	企業と組織	1942	0	3	5	7	3	1	19
9	平和と戦争	1942	0	1	9	62	45	35	152
10	パワーと法	1944	0	1	0	7	5	2	15
11	労働	1945	0	2	2	2	2	0	8
12	農業	1947	0	1	3	1	1	2	8
13	経済/領域と方法	1948	0	3	9	9	18	11	50
14	政策問題と政治生活	1948	0	2	6	22	18	6	54
15	経済学と宗教	1950	0	0	12	6	1	0	19
16	利潤と利子	1950	0	0	7	0	1	1	9
17	一般システム	1951	0	0	6	14	15	21	56
18	社会システムとしての経済	1952	0	0	7	14	5	5	31
19	知識，情報，教育	1953	0	0	4	39	44	25	112
20	倫理	1953	0	0	3	9	10	2	24
21	経済学/製図法	1954	0	0	1	1	3	0	5
22	進化，エコロジー，環境	1955	0	0	3	2	17	21	43
23	イメージ	1956	0	0	1	6	3	1	11
24	水問題	1956	0	0	1	2	0	2	5
25	都市研究	1958	0	0	1	3	6	2	12
26	贈与経済学	1962	0	0	0	5	18	6	29
27	ヒューマン=ベターメント	1963	0	0	0	3	25	16	44
28	芸術と文化	1968	0	0	0	1	3	0	4
29	家族	1970	0	0	0	0	8	1	9
30	エネルギー	1973	0	0	0	0	9	6	15
31	老人問題	1977	0	0	0	0	3	2	5
	合計		16	43	106	281	359	213	1019

出所：K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992.

ら次へとうけつがれてゆくのであると考えられている。偶然に習い覚えたことや自然にうかんだ新しい考えなどがこの例としてあげられるけれども社会進化や経済発展はほとんどすべてこれに当てはまると言う。彼によればこれらは「生物変化を思い出させるところが確かに存在するように思われる。[54]」

彼によれば「すべてのシステムを包括する母集団の個々の要素の成長，発展の理論が備っていることが，発展論や進化論にとって不可欠な

54）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, pp. 20−21.

要素である。それ故，私が企業の理論(8)に関心があることは驚くに値することではない。企業の理論はこの問題への経済学の1つの貢献を示したものであり，それはまた，すべての組織の一般理論というべきものでもある。このことは，ホメオスタシスの理論とどんな行動が組織の性格を維持するかという理論を含み，その上，組織の成長，衰退，最終的消滅の理論まで含むのである。企業の理論はまた，生産の遺伝的理論と一種のノウハウを含む構造の遺伝的理論と価値の減価と消費を補う能力の遺伝的理論をも含むのである。このことが私を魅了して止まないことは驚くに値しない。[55]」のである。

知識と情報

「知識と情報」(19) に関する彼の著作は進化動学への関心の別の側面であり，刊行数が3番目に多い領域である。彼の生涯における最も重要な知的発展の1つは，情報理論の発展であり，その内容は，構造を持つだけでは起こり得ない情報の伝達を媒介するものとして，進化過程においては，物質とエネルギーが重要であるということであった。しかし彼によって「我々はシャムノンとヴィバーのいわゆる「ベルの電話」情報概念を超えねばならない。2人のティーンエイジャーの何気ない電話での会話とブッシュとゴルバチョフとの「ホットライン」での会話は情報量そのものは全く同じであっても，知識やそれが持つ重要性は全く違う。知識とはストックであり，情報はフローである。それはストックにプラスされたり，時にはマイナスされるものなのである[56]。

彼によると知識はいろいろな面がある。まず受精卵が持つ最初のノウハウがある。受精卵は，青白い皮膚，青い目，黒い髪（私が白くなる前はそうだった）を持つホモ＝サピエンスの男の作り方を知っている。だが，それは茶色の目を持つ黒人女性の作り方は知らず，ましてやかばの作り方など全然知らない。ノウハウ以外には「認識（know - what）」すなわち，程度こそ差があるが，真実や現実と写す意識や世界の心の中のイメージなどがある。それ以外には「評価（know - whether）」があり，それは最上と考えられる行動を福広いポテンシャルの中から選び出す評価システムを含むものである[57]。彼によると，これらの理論はまた「人物識別（know whom）」をすることができる。それは，権力構造――そのために人はオックスフォードへ行ったり，ハーバードへ行ったりする――の中では重要なことである。社会成員間の知識分配に関する問題は，すべて非常に重要である。富や所得の分配は知識とノウハウの分配力学と密接な関係がある。金持ちになる過程では，重要なランダムな要素がある一方，対処法を知っているということはかなりの手助けとなる。知識構造はまた「力と法」(10)の問題においても重要であり，それはまた，「イメージ」(23) の問題とも関係がある。これらの問題は彼の最新の著者「パワーの3面[58]」での主題であった。

知識に対するボールディングの関心を最も概説的に述べたのは「一般システム」の中であった。一般システムの動きは基本的には，2つかそれ以上の伝統的な学門分野において共通する理論構造を認識することで，経済学を知識獲得過程に加える試みであった。現在を活動中である一般システムの動きは，彼が「特殊」一般システムと呼んでいるもの，すなわち，特に数学モデルを使用したものと「一般」一般システム，すなわち，哲学的アプローチを展開しているものとに分かれており，彼は大ざっぱに言って，後者に携わっている。恐らく，これは一般システム論における専門化の例なのであろう。

知識の一般的問題への彼の関心の特殊なケースとして知識獲得の方法論に関してのものがあり，その中で特に，経済学でそれがどう展開されているのかに関心があった。彼は種々の分野でのいわゆる「特別な方法」について論じ，我々がいかに物を発見するかという方法は，発見されているものによるのだと論じた。例えば，

55）*Ibid.*, p. 21.
56）*Ibid.*, p. 21.
57）*Ibid.*, p. 21.
58）K. E, Boulding. *Three Faces of Power*, 1989.

非常に安定したパラメーターを持ち，容易に測定可能なシステムである天体メカニズムに適当な方法論は，情報を不可欠な要素として持つシステムには適当でない。情報は増幅されうる不確実性をシステムに与え，そのために，そのシステムは正確な予測ができないものとなってしまうのである。情報理論によれば，情報は衝撃をシステムにあたえるものか，情報ではないか，のどちらかでなければならない。彼によれば「我々は今から10年後に知ることを予測できないし，今そのことが分かっている。生物科学でさえ，この原理に従わねばならない。生物進化でさえ，深遠な不確実性の過程であり，全く起こりそうもないことが起こるまさにその時によって支配されているのである。それ故，天体メカニズムの成功そのものが，他の知識分野へ幾分破滅的な影響を与えたのである[59]。」

統計学においても，不確実性の意味を，彼の先生であったフランク＝ナイト教授の言う見込みやリスクとは全く違うものであるということを認識できなかった。彼によれば「情報システムもまた，限定されはするが，量化をすることができる。同じでないものを数えることは情報を失うことであるが，それはまた知識を作り出すのに役立ち，私が時々述べたように，情報を定期的に失うことによって，知識は得られるのである。事実，特に社会的現実は1つ以上の要因をもつ複雑な秩序である。そこで，我々は総計をそれぞれの部門に分解する分類をせざるをえないのである。しかし，この分類は，その本性からして不正確である。それは世界の複雑さを正しく評価できない。哲学において，分類に関する評価の是非を議論することがないように思われるのは奇妙なことである。しかし我々は，同じようなものを違う分類箱に入れ，違うものを同じ分類箱に入れているのである[60]。」

社会システム論

ボールディングによる「社会システムとしての経済学」(18) の研究は社会科学の統合という古くて新しい問題に遡る。彼によるとすべての社会科学は幾分違った角度から同じもの，すなわち，社会システムを研究しているのである。また，これ以外にも，深い思考を必要とする「倫理」(20) がある。これらは，拡張された知識構造の一部であり，それは特に，「評価 (know whether) を含む。彼によるとそれは我々が判断することができる分野や領域のようなものや善意や悪意といった人間行動のようなものを含み，概して，人間行動の理解に批判的である。学習，知識過程を含む別な分野として「グラフィックス」(21) がある。それに彼は長い間関心を寄せている[61]。そうして，現実世界は本来，地勢学，すなわち形，大きさ，構造，パターン，適合性などから成り立ち，数が基本的に世界の地勢構造の指標として重要であると確信するに至った。これについて，彼がよくひき合いに出す例は，地球表面の種々の場所の緯度，経度，標高を記憶したコンピューターの例である。これらの数字は任意だが，すべて測定されたものと同じものが入力されている。コンピューターのその数字を見ても何だか分からないが，この数に基づき，賢いコンピューターは種々のことが分かる地図を書いてくれる。現在，コンピューターは4次元の地図作製の技術をあまり持ちあわせていない。これは今後の発展が待たれるところである，と彼は主張する[62]。

彼によると基礎的と考えられる他の分野として「利潤と利子」(16) に関するものがあり，それは恐らく「マクロ的分配」と呼ぶ方が適切であろうとされている。これは，所得分配を利潤，利子，地代，賃金間で決定する問題である。これに対して，5番目に大きな分野である贈与 (26) を加えることができよう。この理論は，アメリカと他の世界経済の中心地における利潤がなぜ1932年から33年にかけてマイナスになり，アメリカ経済の中での利子が1950年で国民所得の約1％だったのが，現在の9～10％になぜ上がったのか，労働組合員数が増加し，団体交渉

59) *Ibid.*, p. 22.
60) *Ibid.*, pp. 22－23.
61) *Ibid.*, p. 23.
62) *Ibid.*, p. 23.

がさかんに開かれていた1932年から42年のニューディールの時代，賃金所得の国民所得の比率がなぜ急速に落ちこんだのかという問題を解明する試みである。この問題への最初の真剣な取組みは「経済学再建」という著者の中でであった。彼は国民所得の比率を決定するものは何かという問題の鍵をケインズの「貨幣論」の示唆の中のあるものを利用できることに気がついたと言う[63]。それは「寡婦のつぼ」と呼ばれるもので，ある程度はカルドアによって，そして大部分，カレツキによって発展させられた。「経済学再建」にはいくつかの誤りがあったと認めたので，それらを訂正し「経済理論[64]」として出版した。彼によるとその基礎理論は集合的な経済のバランスシートとしてみれば，利潤は純価値の総増加分を表しているということである。恐らく，これには，二，三つの主要な原因しかない。1つは純投資であり，それは直接的に純価値に加えられるものである。第2に，利潤から受けとる所得から支払われる家計費である。これが，企業に平均費用以上に製品を追求させている理由である。このことは，ケンブリッジに口伝えで伝わるものの一部であると思われるカレツキの有名な言葉「資本家は自分で支出したものから獲得し，労働者は自らの得たものを支出してしまう」の中に表われている。恐らく小さいだろうが，現在では重要な第3の要因は，企業の貨幣ストックの増加である。それは家計からの貨幣のシフトであり，貨幣創造にもよるものである。これを立証するデーターを見つけることはほとんど不可能である。彼はこれを「K理論[65]」と呼んでいるが，それは正統派経済学には，ほとんど影響を与えなかった。正統派経済学者は依然として，大恐慌中に起こった再分配について説明できないにもかかわらず，限界生産力説に固執している，と彼は主張する。

さらに，彼によれば巨視的分配の違った側面としての贈与経済学は，これとは別に発展してきた。それは，ミクロとマクロの両面を含み，最初はなぜ贈与が与えられるのかということを説明し，次に社会へのそれのすべての影響を見つけ出してきた。現在までの贈与経済学の仕事は主にミクロレベルでなされたため，このマクロ的側面は依然として発展段階にある，という[66]。

ボールディングの基礎と応用にわたる「進化，エコロジー，環境」問題への関心は比較的遅く，ニュージャージー州プリンストンで開催された「変化する地球における人間の役割」1955年大会がその出発点であった。しかし，この問題への関心は彼にとっては後になればなるほど興味の増してきた問題であった[67]。

「ヒューマン＝ベターメント」（27）は彼によると他と同様に基礎と応用にわたるものであり，それは，結局は無益だと思うようになった厚生経済学への昔の興味が，そのもとになっているのであろう。つまり厚生経済学はあまりに価格理論に固執していて，多方面にわたる人間行動や贈与経済学を無視しているためである，という。このヒューマン＝ベターメントの広い概念，すなわち，物事を悪いものから悪いものへではなく，悪いものをいかによりよく評価するかということが，1985年に出版した本の主題であった[68]。

彼は生涯を通じて，応用分野には関心を持ち続けていた。――「労働経済学」（11），「農業」（12），1958年，カリフォルニア水問題の社会的，経済的帰結に関するカルフォルニア州委員会で働いたことに端を発する「水問題」（24）「都市研究」（25）社会，特に経済生活における「芸術と文化」（28）の役割社会における「家族」（29）の位置，「エネルギー」（30）問題（恐らく，1970年代のエネルギー危機だった際，彼が原子力代替エネルギーシステム科学委員会ナショナル学会のメンバーだったことによ

63）*Ibid.*, pp. 23－24.
64）K. E. Boulding, *Economic Theory*, 1957.
65）K. E. Boulding, 'Puzzles over Distribution,' *Challenge*, Vol. 28－No. 5（1985）
66）K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 12, p. 24.
67）*Ibid.*, p. 24.
68）K. E. Boulding, *Human Betterment*, 1985.

るのであろう)「老人」(31) 問題(彼も歳をとってきたためである)「宗教経済学」(15) には長いこと興味を持ち続けていた。それは彼の経済学者としての生き方とクェーカー教徒としての生き方との間にある緊張の結果であった。いわゆる「政策問題と政治生活」(14) もまた彼にとって長い間,興味のつきない問題であったのだ。

おわりに——平和と紛争——

しかしながら,このリストの中で最大のものは「平和と紛争」(9)についてであり,これもまた,彼のクエーカー教徒としてのアイデンティティと関係があるものなのである[69]。彼は早くから平和研究には活動的であり,1956年には紛争解決ジャーナル刊行に携わった。平和研究への彼の関心は,その動きが平和要求を促進するという意味で起こったものであまりに平和のぬるま湯につかるということはよくないことだと考えていた。この分野での彼の貢献は「紛争と防御」(1960) と「恒久平和」(1978) である。彼によると後者はオースチンにあるテキサス大学ＬＪＢスクールでのトム＝スリック世界平和客員教授とすごした１年の間に書き上げたものだった。これまで述べてきたように新しい学問分野がこの40年のうちに発展してきて,それらはフランス語で「polemologie」と呼ばれている。イギリスにおいては,平和・紛争研究についてそれが言われている。この研究は今世紀初め,レービス＝リチャードソンととクレイシー＝ライトの著作にさかのぼる。それは現在,国際平和研究学会に継承されている。これは世界にある約100の学会と800人のメンバーから成り立っている。平和と紛争は彼の「仕事の中で最も重要なものだと言い切れる」と彼は言う[70]。空中戦と核兵器の発展は人類にとって甚しい危機であり,封建制と貴族を葬りさり,民族国家設立にいたった15,16世紀における火力と大砲の発展と酷似している。民族国家の一方の側の防衛は封建時代の城での防御と同じくらい時代遅れであり,脅威による平和システムを利用し,全世界的安全保障を発展させるという新しい考えをおし進めてゆかねばならないと考える。

彼は次の様に自伝を結んだ。

「私の生涯は非常に面白く,世界がかく悲劇的な時代を考えると,かなり見苦しいものであろう。昨春,前立腺のガンの発作が起ったが,今は喜ばしいことに完全に健康を回復した。この先も,創造的思想と著作をすすめてゆきたいと思っている[71]。」

69) K. E. Boulding, *Towards a New Economics*, 1992, p. 25.

70) *Ibid.*, p. 25.

71) *Ibid.*, p. 25.

註) 本稿は篠崎日出幸君の和訳を基礎とした。厚く御礼を申し上げたい。